

〒333-0831 川口市木曾呂1317
Tel.048-296-4771
Fax.048-296-7182
ホームページ：http://www.kyoudou-hp.com



ふれあい冬号



特集 協同病院の医療技術職と地域②

鳩ヶ谷支部すこしお教室(食養科)

増田院長の 今日ニコニコ VOL.20



院長 増田 剛

前号に引き続き当院の魅力的な医療技術職をご覧ください

前号(19号)に続いて今回も医療技術職(食養科、薬剤科、ME科、環境管理課)をご紹介しました。このような多彩な仕事で病院の事業が成り立っていることを読者の皆さまに知って頂けたかと思えます。医療や介護の世界は、こうした多様な国家資格を持つ専門職の協働で成り立つ特異な職場です。それぞれの専門性を磨くことを支援するとともに、その職業上の規範に沿って行動する傾向が強い専門職が共通の目標を持てるような仕組みづくりが大変重要です。個々の職員の仕事の総和に+αの付加価値を生み出せるかどうかはそこにかかっています。そのために全ての職場が私たちの理念「人権をまもり、健康なくらしに役立つ医療を地域とともにつくります」の下に目標を持つよう心がけています。奮闘する医療技術職をこれからも応援してください。



2年目職員フィールドワークで、子ども食堂の取り組みを学習しました。助けを必要としている人々をどうしたら救えるのか、一丸となって常に考えています。



虹の投書箱だより

投書のご紹介

「マイかるて」の利用登録を、患者本人しか受け付けられないのはおかしいのではないですか？
病気で動けないから来ているというのに、配慮が足りないと思います。

虹の箱へのご意見、ありがとうございました。

カルテの内容(医療記録)は厳格な管理が求められる個人情報であり、個人情報保護法にもとづいて対応しています。判断能力のある方の場合、ご家族であってもご本人の意思を確認せずにお見せすることはできません。そのため、カルテ開示の簡易的な方法であるマイかるては、患者ご自身でパスワードを管理できる方のみ利用としています。意思決定できる状態にない等の場合は、必要に応じて医師からの病状説明や、申請によるカルテ開示などで対応させていただきますのでご相談ください。(野田 邦子 医療情報管理室 課長)

糖尿病イベント2019開催しました

2019年11月2日(土)イオンモール川口前川にて『糖尿病イベント2019～血糖ってなあに?～』を開催しました。当日は、20代から80代と老若男女問わず、親子や家族連れで足を運んでくださり、来場者115名と大盛況で終えることができました。

来場者の方にはまず血糖測定を行い、医師、看護師、管理栄養士、薬剤師、理学療法士、臨床検査技師、歯科衛生士が健康相談を行いました。病院内だけでなく、私たち医療者が外に出て顔の見える関係をつくり、糖尿病の予防や治療継続の重要性を広める機会となりました。





協同病院の 医療技術職 と 地域②

埼玉協同病院の医療になくてはならない、各部門のプロフェッショナルたち。高度な専門性と熱い志で、地域でも大きな役割を果たしています。今回は後編です。



食養科

心身を養う「食」の知識を伝える調理実習や学習会を地域で開催

吉田 順子 管理栄養士 食養科 部責任者

私たちの体は、食べものによってつくられます。食や栄養を通じた地域の健康アドバイザーとして、管理栄養士が活躍しています。

どんな仕事？

■患者さんの食事づくりと栄養指導

病院の入院患者さんの食事を担当するのが食養科です。栄養科という名称が一般的ですが、埼玉協同病院では、食を通して身も心も養うという理念があり、食養科と名付けています。いま管理栄養士16名、栄養士1名、調理師13名の専門職が働いています。入院患者さん一人ひとりの状態に合わせて朝昼夕の食事やおやつを提供し、栄養指導を行うほか、外来の患者さんへの食生活相談や食事療法のサポートなども行います。

食事は、外部の給食業者に委託せず、すべて職員の手でつくります。栄養のあるものを、なるべくおいしく食べてもらえるよう、配膳方法を工夫しているのも埼玉

協同病院の特長です。病院の食事ですから、患者さんの病状によって制限はありますが、おいしく食べていただきたいという気持ちをしっかりとっています。配膳時間に合わせて加熱し、温菜は温かく、冷菜は冷たい状態で届けられる「再加熱カート」という配膳車を活用しています。

やりがいは？

■食べる喜びを味わってほしい

病院では、一般食のほか病態に合わせた治療食、やわらかい分粥食、刻み食、ミキサー食、乳幼児用など、さまざまな種類の食事をつくります。飲み込みにくい方のための、リハビリ用の訓練食もあります。できるだけ口から食べていただきたいので、食べることが日々の楽しみになるよう、おいしくて栄養のあるもの

を提供するよう心がけています。

食や栄養の知識を地域に伝えていくことも使命の一つです。社会的な問題となっている高齢者の低栄養や、リハビリ中の栄養不足といった課題にも力を入れて取り組んでいこうと考えています。

地域とのかかわり

■保健教室での栄養指導

保健教室や班会で、食べものと健康、栄養などをテーマに、組合員さんに向けてお話をしています。管理栄養士の視点から、バランスのいい食べ方や、塩分のとり方など、食事のしかたや注意点を伝えています。

今後は、高齢者向け、子ども向けといった世代別に、さらに充実した内容に変更されます。



■調理実習の依頼を受ける

地域の班会や支部から、料理教室や調理実習の依頼を多く受けています。私たちのつくった健康レシピを紹介し、健康づくりに役立てていただいています。診療所で実施することもあります。

■子育てサークルでの学習会

同じ月齢の赤ちゃんをもつお母さんに集まっていただいて子育て教室を開き、離乳食の話をしています。当院で出産したお母さんのほか、ホームページでも一般募集しています。

終了後は、参加したお母さんたちでサークルをつくり、食事相談に乗っています。この子育てサークルをきっかけに組合員になるお母さんもいます。

■保健所を通じた情報交換

川口市保健所管内の病院や施設の担当者が定期的集まり、情報交換をしたり、学習会を開いたりしています。現場で困っていることを相談し合ったり、保健所から食中毒についての情報を得たり、衛生管理を学んだりするなど、地域で連携していくための貴重な場となっています。

■ボランティアさんとの連携

院内で、離乳食の調理実習をしています。つくったものを赤ちゃんと一緒に食べてもらうのですが、お母さんに安心して実習してもらえるよう、ボランティアさんに1時間ほど子守りをお願いしています。子育てのベテランの方々なので、とても安心。いつも感謝しています。



すこしお教室

美味しくて塩分控えめな料理づくりを通して、「少しの塩分」で「すこやかな生活」をめざす「すこしお生活」を広く普及することを目的に開催しています。



薬剤科

薬の専門家として地域に貢献 診療所や保険薬局との交流も密に

森口 秀美 薬剤師 薬剤科 副主任

薬の適切な使用や管理は、医療に不可欠です。
がん治療や吸入など専門性の高い薬剤師は、地域でも頼れる存在です。

どんな仕事？

■チーム医療を担う

埼玉協同病院では、薬剤師24名と薬剤助手4名が働いています。法人全体では計40～50名の薬剤師がおり、若手のうち約10名は診療所で研修中。患者さんや組合員さんと身近に接し、地域の方々に育てていただいています。

薬剤師の主な仕事は調剤業務です。医師の指示を受けて薬を用意するのですが、薬剤師の視点で指示を見直し、この疾患にこの薬を使っていいかどうか、しっかり確認したうえで調剤します。

薬剤師になるための制度が変わり、現在は、6年制の薬学部を卒業することが必須条件となっています。かつての4年

制から変更されたことで、医療における薬剤師の役割も、より重要性が高まっているといえます。

埼玉協同病院では、チーム医療が主流になるずっと以前から、各病棟に薬剤師が常駐し、チーム医療に加わってきました。医師が薬剤師に求めているのは、疾患の専門家ではなく、薬の専門家です。そのため、特定の病棟に長くいるのではなく、数年ごとにローテーションして、さまざまな科を経験します。幅広い知識を身につけたうえで、がん治療や感染治療、糖尿病治療などの認定薬剤師の資格を取るなどして専門性を高めるのです。

そうして得た知識や技術を地域に伝える学習活動にも力を入れています。

やりがいとは？

■知識や経験を最大限に生かす

専門の知識と経験を生かし、法人内や医療チーム内に薬剤師がいるからこそできる医療を大切にしていきたいと思っています。

私は、「外来がん治療認定薬剤師」という資格を取得しており、抗がん剤についての患者さんへの説明からカルテのチェック、抗がん剤の調合まで行い、その薬を、自分自身の手で患者さんの元へ届けます。また医師、看護師から相談を受け、治療に参加しています。

また、当院は、日本病院薬剤師会の「プレアボイド報告施設」でもあります。プレアボイドとは、薬剤師が薬を使った治

療に参加し、副作用や、治療効果不十分といったリスクを回避もしくは軽減できた事例を報告・収集する活動です。

手間がかかり、診療報酬上の点数はありませんが、この活動は、薬剤師の姿勢や意識の表れといえます。医薬品のより安全な使用に貢献できるよう、みんなががんばっています。

地域とのかかわり

■がん化学療法など、院外の薬局への情報伝達や学習会の開催

飲み薬や、外来通院で治療できるがん患者さんも増えています。院外処方箋を出し、強い薬を院外の保険薬局で処方してもらい場合が多いので、連絡を密にし、学習会を開くなどして、薬に関する情報共有を強化しています。

看護師からの相談を受け、患者さんが薬を正しく飲んでいるかを確認したり、



処方した薬の内容を保険薬局に確認したりすることもあります。

■吸入薬の地域連携学習会

ぜんそくなどの治療に用いる吸入薬には、特殊なものを含めて、いろいろな種類があります。正しい手技によって確実に吸入できなければ、治療効果が期待できません。そこで、呼吸器チームに入っている薬剤師が、年に数回、地域の看護師や薬剤師、保険薬局を対象に、吸入の手技の指導や、薬の説明をする会を開催しています。そうした活動を通じて、地域全体のレベルを上げていくことを目指しています。

■保健委員研修会での講義

今年度は組合員向け保健教室とは別に、他団体の研修会で講義を行っています。テーマは「生活習慣病と薬」「サプリメントの上手な使い方」など。県内各地で実施しています。

身近でありながらよくわからない薬やサプリメントについて正しい知識をもってもらえるよう、薬剤師の視点でわかりやすくお話ししています。

■「DIニュース」の発行

埼玉協同病院には、医薬品情報を扱うDI(ドラッグ・インフォ



メーション)室という部署があります。院内の薬の情報を管理するほか、近隣の保険薬局と一緒に医薬品の勉強をする機会を設けるなどの活動をしています。

さらに、毎月、「DIニュース」という通信を作成し、地域のクリニックや保険薬局などに配布しています。薬の特徴や、実際に使ってみてどうだったか、どんな副作用が起きたか、供給が止まったときにどう対処したかなど、医療現場ならではの情報を載せた内容で、好評です。読んでいよ、という声を聞くと、うれしくなります。

■診療所との連携

新人の薬剤師は、初年度研修の一環として、1年目は必ず法人内の診療所で研修を行います。患者さんから声をかけてもらって励まされながら地域とのつながりを深め、その後、協同病院に戻ります。

こうした人材の交流によって地域との連携が強まり、一体感が生まれています。



ME科

治療に不可欠な医療機器の専門家 救急から在宅まで

桐生 宣侑 臨床工学技士 ME科

人工呼吸器や心臓ペースメーカーなどの使い方から急なトラブルまで、病院の内外で機器の安全を守っています。



どんな仕事？

■数百台もの機器を扱う

MEとは、メディカル・エンジニアリング(医療工学)またはメディカル・エンジニア(臨床工学技士)の略です。埼玉協同病院では、医療機器の専門技術職である臨床工学技士が11名おり、病院の内外で活躍しています。

病院の中には、人工呼吸器や人工透析機器など、数百台ものさまざまな医療機器があります。それらを購入するときの選定から操作、点検、使い方の指導、現場でのサポート、故障時の緊急対応まで、幅広く手がけます。

手術室の機器の整備、救急の患者さんの人工呼吸器や電気ショックの設定なども行います。患者さんに合わせて心臓ペースメーカーを細かく設定したり、自宅

で酸素吸入療法を行う患者さんのために機器を選び、使い方を説明したりするのも重要な仕事です。

やりがいは？

■機器の先にいる患者さんを救う

医療機器は、思わぬ壊れ方をしたり、見たことのないエラーが出たりすることがあります。治療に支障をきたさないよう、すばやく判断し、応急処置や修理をしなければなりません。経験と知識を蓄積し、医療機器の先にいる患者さんをいかに救うかを常に考えながら仕事をしています。

地域とのかかわり

■在宅医療の機器を扱う

在宅医療を行う患者さんに、人工呼吸器や酸素などの機器を自宅に持ち帰って使ってもらうために、使い方や目的を

しっかり説明しています。心臓ペースメーカーを入れた方も、定期的に外来でMEが動作チェックをしています。

■他院所の機器の点検

法人内で、MEがいるのは埼玉協同病院だけなので、法人内の病院や事業所に年2回出向き、医療機器の点検をしています。トラブルが起きたときに対処したり、機器の購入相談を受けたりすることもあります。

■一次救命処置(BLS)講習

班会や健康まつりに出向き、心肺蘇生法(心臓マッサージや人工呼吸)とAED(自動体外式除細動器)の使い方を講習しています。このほか、中高生の職業体験も受け入れ、MEの仕事の紹介をしています。



環境管理課

安全で気持ちのいい環境をつくる 非常時の電力や水も確保

小野 秀敏 臨床工学技士 環境管理課 課長

電気や水などのエネルギーをはじめ、病院内の備品や設備も安全かつ細やかに。



どんな仕事？

■知識と技術で、病院の機能を支える

電気設備、蒸気、湯水などのエネルギーを供給する設備の管理、緑地帯などの環境整備が主な仕事です。常勤2名とパート1名がおり、送迎バスの運行や病院内の警備、清掃も委託業者と契約して行っています。医療廃棄物が適切に捨てられているかどうか定期的に確認しています。エネルギーがなければ医療を提供することはできません。地味ですが重要な役割を担っています。

ナースコールの修理、棚やホワイトボードの設置など、細かな要望にも応えます。棚ひとつとっても、感染防止に配慮して、一般の木材ではなく除菌しやすい素材にするなど、常に医療者側の立場で考えています。

やりがいは？

■医療と工学の知識を生かす

私はもともとME(臨床工学技士)で、環境管理の重要性を感じたことから自ら希望し、現在の仕事に就きました。電気設備やボイラーなどの工学知識と、医療の知識を併せ持つ専門家が必要ですが、まだまだ少ないのが現状。そのため、ホスピタルエンジニアという資格も取得し、両面の知識を生かして仕事に取り組んでいます。誰でも、気持ちよく、働きやすく、安全できれいなところで治療を受けたり、働いたりしたいものです。その願いを叶えられるよう、環境づくりに取り組んでいます。

地域とのかかわり

■送迎バスの運行

東浦和駅、東川口駅、診療所などを結ぶ

無料送迎バスや、車イスの患者さんの送迎を行っています。地域の方からの要望を受けてバスの路線を見直したり、便を増やしたりしています。

■地域の災害拠点病院として

災害拠点病院の指定を目指し、環境づくりをしています。非常電源や水の確保、備蓄体制といった環境管理によって、非常時に医療が提供できるかどうか左右されます。指定を待たずに、地域の連合町会さんと一緒に防災訓練に取り組んでいます。法人内外の病院や診療所と協力して防災訓練を行うなど、連携を深めていこうと考えています。

専門医19
シリーズ
S E R I E S

栗原 唯生
医師
外科 副部長

頼ってくださる 患者さんの気持ちに 実力で応えたい

おなかの深い位置にある肝臓、胆道、膵臓は、がんの外科治療の中でも難易度の高い分野です。埼玉協同病院では、そうした難しい手術も可能です。担当する栗原医師は、患者さんの力になりたい一心で専門医となり、技術や知識を磨き続けています。

プロフィール▶日本外科学会外科専門医、日本がん治療認定医機構がん治療認定医、日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医、日本肝臓学会専門医、日本消化器外科学会専門医、消化器がん外科治療認定医、肝胆膵外科学会評議員、ICD (Infection Control Doctor) 2005年東北大学医学部卒業、同年埼玉協同病院勤務、2012-13年静岡県立静岡がんセンター肝胆膵外科研修、2014年より埼玉協同病院勤務



スポーツドクターをめざした 野球少年

「中学時代から打ち込んできた大好きな野球と関わり続けるために、スポーツドクターになろうと考えたのが医師になったきっかけです」

こう話す栗原医師は、見るからに若々しいスポーツマン。まっすぐで誠実な人柄と、内に秘めた情熱が全身から伝わってくるようなドクターです。

「いまは運動する時間がありませんが、長時間の手術をするには体力があるので、筋トレだけは続けています。腕立て伏せ、腹筋、スクワット。休日に、子どもたちを公園で遊ばせながら筋トレをすることもあるんですよ」

医学部に進学したのは、看護師をし

ていた母親の影響もあったそうです。埼玉民医連・医療生協さいたまの奨学生として学生時代を過ごし、大学卒業後は、埼玉協同病院で研修医として働きはじめました。その頃には、スポーツドクターではなく、小児科に興味があったそうです。

「最終的に外科医の道を選んだのは、先輩の浅沼晃三医師(現・外科技術部長)からの強い勧めがあったからです。以来、経験を積みながら技術を磨き、大腸がんや胃がんの手術を担当するようになりました」

手術した患者さんを どうしても良くしたいから

外科には、他の診療科にはない特徴があると栗原医師は言います。

「治療のための手術とはいえ、外科医は、患者さんの体にメスを入れて、直接傷つけます。自分の手で患者さんの状態をいったん悪くしてしまうので、責任がありますよね。だから、どうしても良くしたい。そのために何ができるか、常に考えています」

胃がんや大腸がんは、比較的、手術の型(術式)が決まっていますが、難しいのが、肝臓に転移した進行がんの患者さんです。

「肝臓の手術には、いくつもの術式があり、患者さんの状態もさまざまです。幅広い知識や経験をもつ外科医でなければ、手術ができるか、どの術式がいいかといった判断が困難です。駆け出しの頃の私は、知識も技術も不足しており、受け持った患者さんがそう

した状態になったとき、わからないことがたくさんありました。それでも患者さんは私を頼ってくれます。その気持ちに実力で応えられないことがもどかしく、腹立たしくてなりません。だから、わからないことを勉強しようと思い、肝臓、胆道、膵臓を専門にすることにしました」

2年間の専門研修で 肝・胆・膵の力をつける

肝臓、胆道(胆嚢・胆管・十二指腸乳頭)、膵臓は、消化や吸収、解毒など、生命を維持するために欠かせない重要な役割をもつ臓器です。この領域を総称して、肝胆膵と呼びます。肝胆膵のがんを診断し、手術をするには、高度な知識と技術が必要となります。

栗原医師は、2012年から2年間、国内留学のような形で、専門病院で経験を積みました。研修先は、肝胆膵外科で有名な静岡県立静岡がんセンターです。

「厳しい毎日でした。肝胆膵は、まる1日がかりの長い手術が多いので、朝から夜まで手術室にいる日もありました。全国から集まった研修医と切磋

琢磨しながら、一つでも多く経験を積もうと必死でした。そこで得たものは、ありすぎて言いきれないです。あの研修があったからこそ今の自分があると断言できます」

2014年に埼玉協同病院に戻ってからは、先輩や同僚、他の診療科の医師と連携しながら、肝胆膵の手術に取り組みました。

「医療の高度化・細分化が進んだ今の時代、1人の外科医が何の手術でもやるのではなく、総合力が必要です。患者さんの状態に合わせて、どこまで自分達で行うか、都度、判断が求められるのです。現在では、消化器外科に関する手術なら、食道以外、だいたいのはできる体制を整えることができます」

患者さんの命を第一に 困難な手術に挑戦していく

栗原医師が心がけているのは、手術の可能性を追求することと、チャレンジを続けることです。

「私たちの仕事には、患者さんの命がかかっています。総合力を上げて、手術をレベルアップし続けていくため

には、これまで経験したことのないことにも挑戦していかなければなりません。それを、いかに安全に、患者さんの命を第一に行っていくか。強い心を持ち、それを支える知識と技術を高め続けていくことが、外科医として自分にできることだと考えています」

肝胆膵外科は難しい分野で、医師としても、精神的、肉体的に苦しいことが多いといえます。

想定したような結果が出ずしんどくなることもあります。これまで自分が経験してきたことのすべてを出し切って手術をし、それによって患者さんを助けることができたとき、本当によかったと思います。これからも力をつけて、できるだけ患者さんの望む治療、患者さんが納得できる治療をしたい。患者さんからいただく『ありがとう』という言葉に支えられています」



お元気ですか訪問&何でも相談会を今年も開催しました！

水本 留美子 社会福祉士 医療社会事業課 主任

この取り組みは地域交流をする中で、地域包括支援センターや民生委員、町会・老人会からの声を元に企画され、川口市神戸にある見沼町会、老人会との共催で昨年度から実施しています。今年も、買い物に行く手段が無い方々への『買い物支援バス』を実施する事がきまり、その宣伝をしながらの個別訪問と、何でも相談・健康チェックに来てもらえるようバザーも企画、実施しました。当日は組合員・町会役

員、病院職員も含め述べ101名の参加で行われました。何でも相談では、不安なお気持ち等をゆっくりお聞きしたり、介護についての相談もありました。個別訪問では、222件のお宅へ対面訪問をしました。誰に相談しているのかわからなかったと1人で抱えたままの人がいた、自宅内を片付ける事が困難な状況の方もみられた等、様々な状況に置かれている地域の方々の生活実態を知るきっかけを得ました。ま



た、医療生協職員として地域に貢献できるように頑張りたいという気持ちになれました。この訪問で得られた事、地域の実情等、個人では解決しきれない課題に対して、行政に発信し改善していくことができるように、この取り組みを継続していきたいと思います。



第39回
通常総代会



第1回
建設委員会総会

埼玉協同病院 リニューアルと 在宅療養支援病院建設の今

桑田 真央
事務 経営企画室 課長



6月総代会承認後、9月28日に68名の参加で建設委員会総会を開催しました。

10月26日には4つの会社による設計施工業者選考プレゼンテーションを行いました。1日かけて20名の選考委員(組合員11名、職員9名)が一生懸命に業者の説明を聞き、質問し、それぞれの案の評価を行いました。



老人保健施設みぬまが送迎バスを使って「買い物支援バス」の運行スタート！

小林 美沙 社会福祉士 老人保健施設みぬま

市営、県営神戸住宅の聞きとり調査から21%の人が買い物が困難という結果を踏まえ10月から、近くのスーパーまで買い物支援バスの運行を開始しました。1回に7~8人利用されています。約4割が一人暮らしの方で、市営住宅からスーパーまでは片道約

1kmほどあり、公共バスを利用すると半日ほどかかってしまうこともあり、自転車で橋をこえるのが大変だったが非常に助かりますとの感謝を頂いています。今後も第2、4木曜日に運行します。



たまねぎベビー といっしょに

赤ちゃん返り

赤ちゃん返りは環境の変化などで、それまでできていたことができなくなったりする行動です。特に下の子が生まれた時にみられる上の子の赤ちゃん返りは悩みの種ではないでしょうか。下の子にも手がかかるママにとっては本当に大変なことですが、「もっと自分を見てほしい」「かまってほしい」そんな気持ちがワガママに表れ、大人に手をかけさせる、今の自分に必要なことを求める大切な行動だと言われています。子どもの成長は自立と甘えの繰り返し、赤ちゃん返りは前に戻ってしまったのではなく、一歩成長する過程です。いつか大変だった日々を笑って話せる日が必ず来ますので、三歩進んで二歩下がる、子育てはそれでいいと自信を持って向き合ってみませんか。



赤ちゃん返りと上手につき合うための10ヶ条

- ① 急にお兄ちゃんお姉ちゃんにはなれないよ、大きくなったのは気のせい！
- ② 怒らずに、ゆっくり向き合って話を聞いてあげよう！
- ③ できていたことはまた必ずできるから、あせらずに！
- ④ やってほしい欲求にできるだけ応えてあげよう！
- ⑤ ギュッと抱きしめて、スキンシップは大切に！
- ⑥ 『がんばっているね』と認めてあげよう！
- ⑦ 上の子と二人だけの時間をつくってあげよう！
- ⑧ 手伝ってくれたことには『助かるよ、ありがとう』と感謝の気持ちを！
- ⑨ 自分の時間、ストレス発散の機会も大切に！
- ⑩ 自分も誰かに甘えよう！

前に進む一歩も、後ろに下がる一歩も
誰かに寄りかかって歩みを止めることも大七に！